

令和元年6月5日発行(毎月5日1回発行)
第59巻6月号(通巻719号)

風土



蜉蝣や鵜の瀬に深きひとところ

(句集『高蘆』より昭和四十五年作)

この句は、若狭、丹後に遊んだ時のものです。丹後の舞鶴には「風土」幹部同人の浜明史がおり、共に若狭の神宮寺を訪れたのです。「鵜の瀬」は神宮寺の飛び地で、三月一日に奈良の「お水取り」に先がけて「お水送り」の神事が行われます。すでに神事を終えた、「鵜の瀬」は渦を巻いて流れているだけです。桂郎師はふと「蜉蝣」を見つければ、そのはかない命に想いを寄せながら、「鵜の瀬」の暗い淵に見入っているのです。

あとずさりわがいつかぎり罪のなし

(句集『高蘆』より昭和四十五年作)

桂郎師は、浜明史たちと更に足をのぼし、北陸の西国八十八力所を詣でました。「あとずさり」は「蟻地獄」の別称です。桂郎師は、とあるお寺のお堂の床下に「あとずさり」を見つけました。しばらく佇んでいたのですが蟻一匹も落ちません。「あとずさり」に殺生がなかったことを「罪のなし」とつぶやいたのです。

妻に供ふ見るたび減つてさくらんぼ

(句集『幻』より平成九年作)

この「さくらんぼ」は亡き妻の好物だったと思われます。「さくらんぼ」が出回るときつそく仏壇に供えました。ここから先は器師自身に語ってもらいます。自註句集『神威器集』(俳人協会刊)より「さくらんぼが減るのは、実は私がつまむからである。もっとありていに言えば、さくらんぼをつまむために仏前に立つからだ」。この自註から、器師が妻の魂と語るためにひんばんに仏前に佇んでいることが解り、微笑ましくもあります。ありますが、器師は、「椿のいのち」が妻の魂と融合して、「吾が魂」にひびいてくるのを実感しているのです。

一人にも風立ちにけり含羞草

(句集『幻』より平成九年作)

この句の「一人にも」は、器師のことですが、「妻に先立たれ、一人暮らしになったがその一人にも」と深読みできます。妻と共にあった時の風が、一人の私にも吹いてくれるのです。何でもないような句ですが、妻の死の悲しみから少しずつ解き放たれ、自然(季節)の機微を感受している器師がいます。

春のくれ
南うみを

風はまだ地べた離れずいぬふぐり

かまぼこ屋餅屋覗きつ雛めぐり

雛の忌の雨なら傘をささずとも

下萌をひつ搔き脚立すゑらるる

剪定の枝見定めつひと巡り

剪定の梯子をぐいと木の股に
畝作る鋤の強さよ初つばめ
燕来とからすのゑんどう立ち上がる
土竜除うなりだしたる彼岸西風
つくし果つ杉菜に押され傾きつ
それぞれの木の芽のこゑに目をつぶり
鯉の餌に亀の来てゐる春のくれ



竹間集

同人作品



杉花粉

浅田 光代

初つばめ山城近江の国割つて
歌ふやうなこゑ現れてクロツカス
老梅の洞やすこしの花溜めて
春分の日のなんと大きなオムライス
子猫はや威嚇のポーズにて立てり
春愁の歩幅にいそしぎの歩幅
脳内に杉の花粉の降り積もる

しやぼん玉

柿沼 盟子

啓蟄や地下への磴に風の急
沈丁やもひとつ裏の径をゆき
天地に幣振るごとく雪柳
脚太き木椅子並べて卒業す
屋敷林南に尽きて藪椿
上水に瀬のあり木々の芽吹きをり
一粒は疾風にのりてしやぼん玉

蝶生まる

高村 令子

曲がるたび春の嵩増す細小川
蝶生まる翅整へて風を待つ
初蝶の羽にやさしき里の風
産衣干す春日遮るものの無く
意のままに動かぬ手脚地虫出づ
息吐いて吸つて芽吹きの九十九折
句に生きて生きて卒寿や福寿草

行く春

土井 三乙

少年に乗れとぶらんこ揺らぎをり
春昼寒川神社二句の影を落として飛ぶ鴉
鴉百まだ空にをり春夕焼
鴉百容れて鎮守の杜おぼろ
蒲公英や収り壊さるる交番所
先頭は水車のあたり花筏
行く春のうぶすなの空鳶の空

春 星

林 いづみ

烏雲に墓石の文字の隸書体
啓蟄や魚はまぶた持たざりき
北斎の雅号三十涅槃西風
渡良瀬に火の手の上る朝雲雀
一隅に光あつまる雪割草
春星や十三回忌過ぎてなほ
黒光る踏絵狐狸庵遺品なり

春一番

小林 共代

春一番伊八の波を裏返す
囀りや湖のほとりの美術館
山寺の崖にゆとりの露の臺
石棺は男の身幅風光る
広縁に干さる大釜椿東風
横利根の堤にしかと野焼跡
今もなほ真間の入江の川柳

花

中根 美保

杉の秀にとどまる雲や山笑ふ
一すぢの水が水車に木の芽晴
腹擦つてゆく大鯉や桜まじ
堰越えてよりは急がず花筏
ある時は空に吸はれて花吹雪
土の香の親しき春の日傘かな
花屑の集まりてをりポンプ井戸

ほととぎす

橋添やよひ

田水沸く朽木の里の塞の神
麦秋や村に一軒なんでも屋
雲の峰侵蝕谷は蛇行せり
「志^し子^こ淵」の神を難所に夏の川
泰山木切り立つ淵の碧さかな
夏川やかつて筏師唄負ひ来
柿若葉近江源氏の裔の里
將軍の隠棲の郷溪うつぎ

信長の隠れし窟〔註〕敦賀侵攻から撤退時青あらし

青嵐崩れし隠れ岩〔註〕二つ

涼しさや信長よりの革袴

草笛を鳴らすも陣屋跡の風〔註〕領主朽木元綱の保護を受け家臣に送られる

茅葺の陣屋や苔の花盛ん

井戸残すのみの陣屋や石菖蒲

資料館に木地師塗師や風薫る

青葉木菟轆轤匏の爪の錆

目白鳴く先祖の知恵の麻の糸

里人へいとま乞ふ間の夕河鹿

柚人の余韻涼しきひと日旅

大原へ峠は二つほととぎす

山河集

同人作品



南うみを選

鳥帰る渦の名残りの潮の帯
八重霞神話の国に入りにつけり
戦争を逃れし雛の髪を梳く
啓蟄の渋谷にあまた出入口
盛りで売る出町柳の剥き蛭

奥田 茶々

雪解けの光ささめく屋敷畑
鋏持つ指のかたまる寒戻り
まだ出せぬ盆栽木の芽漲れり
新しき今日の濁りに雪解川
硝子戸を攻めては溶ける春の雪
春塵のひだ嫋やかに技芸天
手のふれて髪ひんやりと春の宵
三月やじやがいもの芽をかき落とす

森屋 慶基

岡 尚

春の川光琳模様描きつつ
芽柳や野に光るものあふれ出で
壁に記す牛の出産初雲雀
啓蟄の乾きし土を粗く鋤く
みちのくのまだ荒くあり木の芽風
春北風や鱗を飛ばし魚さぼく
後ろ手に取りし真砂女の春シヨール
線香の香り漂ふ春日傘
春水の堰乗り越ゆる音高し
逃水や古き日記に予言あり
チユーリップこの原色に迷ひなし
初燕公証人に逢ひにゆく

森田 節子

瀬戸 薫

風土独語／南 うみを



目張り寿司山盛りにして梅見茶屋

上辻 蒼人

「目張り寿司」は高菜漬に包んだ握り飯。大きいので目を見張って食べることから呼ばれます。熊野地方の名産で、山仕事などの昼飯に持っていきます。梅見茶屋で、大鉢に山と盛りられているのに驚きましたが、作者の在所を考えればこの野趣味は最適です。

鳥帰る渦の名残りの潮の帯

奥田 茶々

「鳥帰る」頃から、「渦の名残りの潮の帯」は鳴戸の渦潮であることがわかります。「鳥帰る」から、作者は鳥の眼となつて、渦潮が果てる様子を描いているのです。悠久の昔から変わらぬ自然の営みを見事に定型におさめました。

帰り来て衣の霞はらひけり

岡本 尚子

「霞も秋の「霧」も微小な水蒸気が煙のように空中に漂い、視界を悪くする現象です。ただし「霧」が濡れる感じなのに、「霞」は乾いた感じをうけます。作者はその感覚を「霞はらひけり」と表現しました。感性が佳き言葉と結ばれました。

新しき今日の濁りに雪解川

森屋 慶基

積雪の多い東北では、雪解水をはらんだ川が濁流となつて駆け

下ります。時には洪水になることもあります。「新しき今日の濁り」から、作者は毎日のように「雪解川」を見ているのです。それはまた春を連れてくる「濁り」でもあるのです。

アイゼンの雪搔く音や路の臺

眞弓 真翁

「路の臺」は春の先がけの山菜です。雪国では雪の間から顔を覗かせます。「アイゼン」から、この「路の臺」は山の雪渓の近くから出てきたのでしょう。雪山にもまた春が来しました。

春塵のひだ嫺やかに伎芸天

岡 尚

この句を読み、細見綾子の「女身仏に春剥落のつづきををり」を想い起こしました。春の塵が、技芸天のしなやかな衣の襞に、うっすらとあるのを想像します。「春塵」の本意をずらしました。

かたかごの反りゆるやかとなりけり

山田 健太

作者は、もつとも「かたかごらしい花の反り」ではなく、時間を置いた「かたかご」を描いています。なんでもないようですが、「反り ゆるやか」の措辞が「写生の眼」なのです。

後ろ手に取りし真砂女の春シヨール

森田 節子

「真砂女」とは「鈴木真砂女」のことです。恋多き波乱に富んだ人生を送り、経営する小料理屋「卯波」は俳人の集う店として有名でした。春シヨールを「後ろ手に取り」が、真砂女を彷彿させます。

風土集



南うみを選

鉄幹の洞を覗きぬ戻り寒 五條 上辻 蒼人

目張り寿司山盛りにして梅見茶屋

鱒船夕日の中を戻りけり

屈折の明治の玻璃戸春日差

春日野の間整へて修二会果つ

小倉山の時雨亭跡春かすみ 相模原 岡本 尚子

湖東三山霞の中の仏かな

奈良坂や霞の中の金の鴟尾

帰り来て衣の霞はらひけり

春シヨール背すぢ伸ばして歩みけり

光る海見下ろす尾根の宵しづく 立川 眞弓 真翁

アイゼンの雪搔く音や露の臺

大空に黒富士聳ゆ二月かな

白魚の群れの動きに水面揺れ

大の字に寝転ぶ土手や草萌ゆる

かたかごの反りゆるやかとなりけり 水戸 山田 健太

退職の妻のかがやく朝寝かな

啓蟄や針箱に胃の常備菓

山盛りのレタスの前に困惑す

ものの芽の出かかりし頃疼きたる

黄水仙揃ひの色の雨合羽 舞鶴 谷田明日香

春昼の電車胎内とはかくや

木馬路のところどころの董かな

橋くぐる婦唱夫随の春の鴨

ランドセルピンクに黄色風光る

沖はるかみえぬて遠し菜の花忌 横須賀 平田きみこ

いつまでと思ふ雛を納めけり

涅槃西風寺の孔雀の眼状紋

夫の忌の「酔心」に添ふ花菜漬

師の花や山の董に屈みては